

空白を埋める熱量の電波

岡本 洋祐

先進国の日本では発展途上国と違い、子ども達が質の高い教育を受けられる環境が出来上がっている。しかし文部科学省が行なった調査によると二〇二〇年度小中学校における長期欠席者の数は二万七千四百七十八人、そのうち不登校の児童生徒数は十九万六千二百七十八人に及ぶことがわかった。さらに不登校の人数は八年連続で増加しているという。質の高い教育を受けられる環境があるにも関わらず、それを選択しない子どもが増え続けているのだ。日本における不登校問題は深刻化している。そんな学校に行かないという選択をした子ども達を取りこぼさない社会にするためにはどうすれば良いのだろうか。

はじめに、不登校になるとどのような問題が起きるのか、考えてみたい。まず、毎日登校できる生徒に比べると授業を受けない日数分、学習進度が遅れてしまう。また、新しく

習う單元を自分だけで理解することも難しいので、不登校の期間が延びるほど遅れを取り戻すことが困難になる。周囲より勉強が遅れると、疎外感を感じがちで、ますます学校に行きづらくなる。生活習慣も乱れる上、人と接する機会も減るため、孤独を感じやすくなる。精神的な面でダメージを負う恐れもあるだろう。実際、文部科学省が発表した「令和二年度児童生徒の問題行動・不登校生徒指導状況の諸課題に関する調査」によると、小中高生の自殺者は四一五人。昨年に比べて九八人増加しており、また調査開始以降最多となつていいる。

このように、不登校が日本の大きな問題として認識されていいる一方で、この状況を救うシステムはまだ確立されていいるとは言い難い。周りに置いていかれた疎外感や孤独感により弱つた心と身体をカバー出来る社会になつていけば、「誰一人取りこぼさない持続可能な社会」になれるはずだ。

だが実は不登校の子どもを救うには、周囲からのサポートだけでは不十分だ。不登校の子ども達は、学校に価値や意味を見出せていない。自ら動き出そうという、内側から来る熱量が無ければ道は開けないのだ。日本財団不登校傾向にある子どもの実態調査の中には、不登校または不登校傾向にある現中学生と卒業生に聞いた、どのような場所だったか、学びたいと思うか、という問いに対して、最も多かった回答が「自分の好きなことを突き詰められる環境」だった。彼らが、現在の教育環境では好きなことを突き詰められないと思っていることがわかる。好きなことは人とそれを比べた。それを不登校の子どもが自分を見つけて、自分の意思で将来の目標を決めること。こそが、この問題を解決する最大の鍵となる。自分自身は将来これをやりたい、ではそのためには何が必要か、今のうちからやれることは何か、といった、自らを奮い立たせるような目標があればそこに向かっ

て努力

力出来るはずだ。このように未来に希望を持
れば精神的に病む事も無くなつて行くので
はないか。

このように不登校を空白の時間にさせない
ことが重要だと僕は考へる。もし、不登校の
期間に将来について自分の目標を見出すこと
ができれば、この時間が無駄にならないう。不
登校期間を空白の時間にさせないためにでき
ることはないだろうか。本人達が将来の明確
なビジョンを作る手助けになる物は何か。

僕は深夜ラジオこそが最適なツールだと考
へる。

生活習慣が乱れ夜も眠れない、という不登
校の子どもにとって、夜は想像力や感受性が
豊かになり気持ちが悪くなり落ちこみやすい。
故に将来の不安や孤独を押しつぶされそうに
なる時間帯でもある。逆に言えば、感受性が
豊かな時間帯だからこそ、同じ言葉でも心に
深く刺さる。ラジオの深夜放送は、眠れない
不登校の生徒に寄り添い、不安が膨らむ彼ら

の心に前向きなメッセージを伝えられることが出来る。と僕は考える。

中京大学の加藤晴明先生が書いていた「ハラジオの個性」を再考する「ハラジオは過去のメテイアなのか」という論文には二〇〇八年六月八日に中京大学において開催された二〇〇八年度春季研究発表会シンポジウム「ハラジオは過去のメテイアなのか」の内容をもとに加藤先生が書き下ろしている。その中で「ハラジオはリスナーとの一対一のメテイアである

点を強調している。ハラジオは「みなさん」ではなく「ハラジオの前の君」に語りかけるメテイアだ。大衆を相手に作られるテレビやラジオはリスナーと「遠い」ハラジオはリスナーと「近い」ハラジオの「一対一」のメテイアのためリスナーとの心の距離が近い。このようなハラジオの特性を活かすことができれば、深夜の時間帯に、憂鬱な日常からの逃げ場であり、シエルターとしての存在として、ハラジオが不登校の生徒たちを救うことが出来るだろう。

う。

僕は深夜ラジオを通して、不登校の学生たちに自分が将来心からやりたいと思える仕事や生きがいに出会うきっかけを見つけてもらういたい。今こそ、ラジオというメディアを使っ、日本の教育問題を解決したいと考える。

僕はラジオの深夜放送を使っ、大人の本音が聞ける場所を作りたい。具体的に言う、様々な職業の様々な人生を歩んできた大人達をゲストで招き、自分の人生について話す生放送での番組を作りたい。例えば今の職業を選んだ理由、何を生きがいにしていくのか、趣味や好きな物について、また学生時代のたわいもない話やこれまでの失敗談、自分の人生に多大な影響を与えた物など。芸能人やインフルエンサーなど、話すことに慣れている人がインタビューとして、元々パーソナルの話を引き出してもらおう。他にもゲストの思い出の曲をかけたり、ハカキやメール、電

話などを使ったりスナードとの交流を行う。時間
間を気にせず話してもらいたいので番組の時
間は一二〇分。パリリナリテ、が同じ時間帯
にラジオの向こう側で語っている。深夜の時
間帯に、自分達だけの秘密基地のような空間
で不登校の生徒達と本音で語り合う。そこに
は大きな「熱量」が生まれるはずだ。その言
葉が深夜の時間帯に、感受性の高い不登校の
子ども達の心に届けば、日中学校の教室で行
われる補講などの支援を行うよりも、不登校
の子ども達が将来の夢や生きる希望を見つけ
られる機会となるだろう。学校が提供するサ
ービスよりも早く立ち直ることが出来るの
ではないだろうか。

熱量のある話は聞いてて面白いし、熱量の
ある文章は読んでて面白い。取り繕った姿や
言葉では人の心は動かせない。へ好きの熱
量こそが人の心を動かす。そして熱量は連鎖
していく。僕は深夜ラジオを通して熱量の連
鎖を作り出したい。そして不登校の子ども達

には、学校へ行かなかった経験を「コンプ
ックス」ではなく、他人には無い自分だけ
の武器」だと思ってもらいたい。

実際僕は中学生の時不登校だった。その不
登校だった期間に、将来ラジオディレクタ
ーになっで不安に押しつぶされそうなお子ども
達を救いたい。そして生き続けるさ。かけを
与えたい」という目標が出来た。それは僕が
深夜ラジオに出会って、深夜ラジオにト生救
われ、ラジオの向こうで話しているパリッ

リィンやトマッてさん達の熱量が電波に乗っ
て僕に伝わったからだ。夢も希望も無かった
自分は深夜ラジオに出会えたからこそ、今そ
の目標に向かっで生きている。

僕は深夜ラジオに命救われた。深夜ラジオ
は人の命を救うことが出来る。そう確信した。
今の自分にはあの頃の自分を動かせるほどの
熱量があると信じている。この熱量がいつか
未来の若者の心を動かす日を僕は夢見ている。
それが「誰一人取り残さない社会」を作るた

めの一つの柱になることを信じている。